

佳作

## 自分との戦い

東京都 文化女子大学附属杉並高等学校一年 野口歩美

二〇〇五年九月四日。幕が下りると、私の瞳から涙が溢れた。この約九カ月間の沢山のできごとが、まるでフラッシュバックのようによみがえってきた。

私は今年、普通の高校一年生にはない、とても特別な経験をさせてもらった。それは、昨年から続けて二年間、キッズミュージカルに出演したこと。「ミュージカルキッズ アルゴ」かぐやの浦島モモタロウ「これが今年、私が出演させてもらったミュージカル。今年で十九年目

踊る、同年代の子供達。「私もこの舞台に立ちたい!」と思った。

初めてのオーディション。どうせ受からないと思っていただけで、合否通知の書類に書かれていたのは『合格』。期待していなかったはずなのに、涙が出るほど嬉しかった。

そして二年目の今年。また新たな気持ちで練習を開始して、しばらく経ってからのことだった。長時間踊り続けると、左足の親指のつけ根が痛くなるようになってきた。それでも踊らないうわけにはいかない。痛くなったら冷やして、また踊って。痛みはそれほどひどくなかったため、そのまま通し稽古を経て、舞台稽古に突入した。初めから比べると、だんだんと痛みが強

を迎えるアルゴミュージカルは、歌手で作詞・作曲もされ、二〇〇五年度モンブラン国際文化賞を受賞された小椋佳さんが企画をなさっているミュージカルである。そして今年の出演者は私を含め、小学五年生から高校二年生までの少年・少女二十六名のみ。

私がこのミュージカルに出会ったことは運命だったのだろう。中学二年生の夏。父の仕事の関係で、初めてアルゴミュージカルを観に行った。舞台の上で一生懸命に、楽しそうに歌いこなっていた。私は踊る場面が多いため、テーピングをして痛みをやわらげ、不安な気持ちのまま本番を迎えることになった。しかし、舞台上では痛みなど感じなかった。ただ一生懸命に踊り、なんとか本番をつとめていた。

東京公演の中日。作品の後半にある少し長いダンスナンバーを踊りおえて幕に入ると、強い足の痛みにおそわれた。左足のふくらはぎの筋肉はパンパンにはっていて、指のつけ根もすくく痛い。でも舞台はまだ終わっていない。スタッフさんに足をもんでもらい、衣装を替え、私はまた舞台上に出ていき、最後まで踊り続けた。東京公演中はこれがくり返された。

地方公演が始まると、足が痛いことにイラ

イラしはじめ、そんな自分にも腹がたつようになった。休演日にマツサージに通い、踊りたいのもガマンしてゆっくり休んでも、公演日に踊れば、また痛くなる。毎日時間をかけてもんでも、簡単には治らない。そして舞台に出ていくのが恐くなった。上手く踊れない…。

「もうイヤだ！なんで？どうして？舞台上で痛くて踊れなくなったらどうしよう！すっかりネガティブになった私は、こんな事ばかり考えて、ついに泣いてしまった。でも途中で気がついたのである。「泣いたからって痛くなくなるわけじゃない。残り少ない舞台。踊っている時に痛くなって、上手く踊れなくても大切にしたい。精一杯の気持ちで伝われば、それで良いじ

やないか！」と。それからの公演はあつという間だった。足が痛くなっても、負けるもんか！」と歯をくいしばった。私のエネルギーが一番後ろのお客様まで届くようにと全力で歌い踊った。

二〇〇五年九月四日。ついに迎えた千秋楽。私の心を支配する緊張と興奮。この日は、公演前の準備が今までで一番慌ただしく、テープイングをしている時間がなかった。今年の公演がはじまって以来初めて、テープイングなしで本番の舞台に立った。

「大丈夫。絶対に大丈夫。」  
と自分に言い聞かせながら、一生懸命に踊った。そして最後の曲を歌いきり、たくさんの拍手の

中、幕はゆっくりと下りていった。「おわった。」  
そう思った瞬間、私の瞳から涙が溢れた。

しかし今になって思う。全公演を無事につとめられたのは、先生方、スタッフさん、そして、ずっと励まし続けてくれた家族と友だちがいたからこそなのだ。私の周りには沢山の人がいる。

公演は終わってしまったけれど、足の痛みも、その他沢山の事において、『自分との戦い』はまだまだ続く。とにかく前に進むのみ。一歩一歩を大切に。

